

■特集 全日本プロレス第2弾 ■

全日本プロレス・ヒストリー昭和50年 前編

国際プロ選手会決起、激流の日本マット界を馬場は・・・

アントニオ猪木の執拗な挑戦を黙殺し続けた馬場だったが、その消極的な姿勢にプロレス・マスコミやファンからの批判を浴びる事となる。その馬場が猪木を黙らせる為に重い腰を上げて開催したのが伝説のオープン選手権であった。馬場がオープン選手権を開催するまでの経緯を追ってみよう。

NWAとPWFFが認めない！

昭和47年、馬場と同期生であり、ライバルであるアントニオ猪木は、日本プロレスを除名され、新日本プロレスを設立する。昭和47年末に、猪木は日本選手権の開催を提唱。馬場をはじめ、ストロング小林、大木金太郎、坂口征二といった各団体のエースに参加を要請する。しかし、猪木の呼びかけに応じるものはいなかった。このあと猪木は、ことあるごとに馬場への挑発を続ける。そして、昭和49年には、ストロング小林との昭和巖流島の戦いを皮切りに、大木金太郎、坂口征二と戦い、日本選手権開催への機運を高めることに成功。そして、満を持して馬場への

公開挑戦状をたたきつけたのである。これを契機に専門誌では「馬場と猪木は対決すべきか？」なる特集記事も登場し、日本のプロレス・ファンの興味はB1対決が中心となりつつあった。

しかし注目の馬場は猪木の挑戦表明に対し、「猪木君からの挑戦に関して、NWA会長のサム・マソニックとPWFF会長のロード・ブレアースに相談したが、猪木君と戦うことは認められなかった。NWAグループの間ではない猪木君とは戦えないということだ！」と、これを拒んだのである。これは東京プロレス時代に、猪木が馬場に挑戦を表明した時に「日本プロレスリング・コミッションナーの非認可団体のレスラーである

る猪木とは戦えない」といった日本プロレス幹部の論法をアレنجしたものに他ならない。この馬場発言に反感を抱いたファンは多かった。専門誌には「馬場は弱虫だ！」と言った投稿が。しかしこのいわゆる「NWAフレーム理論」は馬場の栄光の戦歴を振り返ると非常に矛盾していることに気づく。馬場が日本プロレス時代に名勝負を繰り広げた、ブルーノ・サンマルチノ、ディック・ザ・ブルーザー、クラシヤー・リソフスキーなどはNWAの敵対団体であるWWFF、AWAの「フレーム」の中で活躍していた人間であったからである。

この「NWAフレーム理論」に対して猪木は「NWAが私と馬場さん

を戦わせないというのであれば、独占禁止法違反だ。ロスのカートリンガー弁護士に調査を依頼して、場合によればマソニック会長を告発する！」と一歩も引かない。これに対し馬場も「今の日本マットには国際タイトルが存在するのだから、いまさら日本選手権は必要ないだろう」と、猪木の日本選手権構想を二蹴。すると猪木も「馬場さんが俺との戦いを避けるのは、自信がないからだ！」と反論。両者の舌戦はさらさらヒートアップしてゆくのである。

このような「緊張状態」の中で開催されたのが「プロレス東京スポーツ賞授賞式」（現在の「東京スポーツ・プロレス大賞」）である。マソニックは「馬場か猪木かどちらか欠席す

るだろうか？」猪木が馬場に襲い掛かるのでは？」といったまことしやかに噂が流れていた。

猪木はダークグレーのフォーマナスーツに身を包んで登場。一方の馬場はチェックのジャケットに白のスラックスといったカジュアルなスタイルで姿を現した。この授賞式には「受賞者以外の来場は遠慮願う」との東京スポーツの要請があったにもかかわらず、グレート小鹿、サムソン・クツワダらが、馬場の周りを固めていた。中には「馬場は猪木にビビっている？」と軽口を叩く報道陣もいた。

馬場と猪木が公式の場で顔をあわせるのは、猪木が日本プロレスを除名された昭和46年12月以来、約4年ぶりのことである。両者は互いに意識してか目線すらあわそうとしない。猪木は年間最高試合賞(小林戦、最優秀選手賞を獲得、馬場は最高殊勲選手賞を獲得。東京スポーツも両者の顔を潰さぬように、苦心したに違いない。井上社長を中心に、受賞者が壇上に集まり記念撮影。カメラマンが馬場と猪木に握手を促すが、互いに聞こえぬふり。会場に緊張が走った。

表彰式が終了すると懇親会に参加せずに馬場が小鹿、クツワダらとともに会場を後にする。結局マスコミが期待したような「場外乱闘」は勃発せずに終わった。馬場が会場から姿を消したことによって、会場には一転、和やかなムードが漂う。鶴田が猪木のそばに駆け寄り「これからいろいろ教えてください」と頭を下げると「君は日本プロレス界の宝」と鶴田をほめる。そばについていたマシオ駒が山本小鉄と談笑。ザ・デストロイヤーも猪木に握手を求め昔話に花を咲かせた。ストロング小林も国際プロレスの面々と近況報告しあうなど、会場はあたかも日本プロレスと国際プロレスの同窓会のような和やかな雰囲気になった。

国プロ選手会も日本選手権を提唱!

馬場と猪木がニアミスした「プロレス東京スポーツ賞授賞式」から2日後、またまた事件が起こる。なんと国際プロレス選手会が、猪木の日本選手権開催に呼応して記者会見を開いたのである。IWA世界王者のマイティ井上を中心に、グレート草津、ラッシュヤ木村、アニマル浜口、寺西勇の5人は、高田馬場にあった国際プロレスの事務所に近いニュ

ーアサヒ・ビヤホールで記者会見を開き、馬場VS猪木を中心にヒートアップする日本選手権をめぐるマスコミの報道に対し、「俺たちを忘れるな!」と声を上げたのである。当時国際プロレスの看板レスラーであった井上は「馬場とでも猪木とでも小林とでもやりませう!俺は変な理屈をつけて断ったりしない!」と、馬場の「NWAフレーム理論」を暗に批判するような発言をやつてのけたのである。

何度も書いているが、当時の日本マットは、全日本プロレスVS新日本プロレスの「仁義なき戦い」に注目が集まり、国際プロレスは両団体との格差が加速度的に大きくなりつつあった。選手たちがあせつたのも無理からぬ話。この日、記者会見を開いた5人は、「昨年末から猪木さんが提唱した日本選手権への参加を社長に申し込んでいたが『俺が根回しをするからもう少し待て』と押さえられていた。しかしこの時期を逃してはチャンスはなくなると思い、社長には相談せずに選手会の意思でこの会見を開いた」とマスコミに説明している。

この「国プロ選手会決起!」の報を聞いた猪木は「国際プロレスの選

手も元気がいいね、まあ、1億円のファイトマネーを用意してくれば挑戦は受けますよ(笑)。それに比べ馬場のところは逃げるばかりで、実際の連中を見習えといいたいね。しかし(国際の選手が)吉原社長の意向を無視したというのはよくないなあ。」と答えている。しかし、筆者はこの会見は決して国際プロレス選手会の勇み足会見ではなかったように思う。というのは、猪木は昭和49年末に、なんと芳の里を仲介人として吉原社長と密会。日本選手権開催と統一コミッション設立について語り合ったといわれているのだ。つまり、新日本&国際連合軍が一時的ながら誕生していたのではないかと筆者は見入る。このまま埋もれてたまるかという思いで選手たちが決起したとも考えられるが、国際選手会の会見には、前述のような政治的な動きが背後にあったと見るのが妥当ではないだろうか?つまり、新日&国際連合軍の馬場あぶり出し作戦だったのではないか?